

すずきのこ



幼稚園型認定こども園
尚綱大学附属こども園

日本代表から学ぶ子どもたちの未来を育てる力

ワールドカップ(以下WC)二〇二六では、日本の活躍で盛り上がりつつあります。明日のブラジル戦が楽しみです。(現在二九日月曜です。発行される三〇日、笑顔で届けたい)サッカーだけでなくスポーツ選手等が世界で活躍するのは自分の事のように嬉しいものです。

私がWCと出会ったのは一九八六年のメキシコ大会です。マラドーナの「すぎのこ」年度五人抜きや神の手で話題になった大会です。仕事が終わった土曜の午後、何気に見た試合に目が釘付けになりました。ベルギー対ソ連の試合で延長までもつれた結果、四対三でベルギーが勝った試合でした。物凄い試合で、サッカーとは、またWCとは、こんなに面白いのかと夢中になるきっかけになりました。時代は進み、リーグができ水前寺競技場でジーコを見て興奮し、ドーハの悲劇で仕事も手につかないほど落ち込み、シヨホールバル

の歓喜では絶叫しみんな嬉び合いました。ですが初めてのWCでは三連敗。世界は遠い遠い先という気がしました。それから八大会連続の出場。優勝を目指すが現実在にあり得ると思えるほど強くなったことが自分の事のように嬉しく思います。

もちろん、高い技術や体力は欠かせません。これまでの指導者や関係者の方を中心とした地道な育成の成果でもあるでしょう。またそれと同時に今回強く感じたのは、仲間のために走る献身性、自分の役割を果たそうとする責任感、苦しい場面でもあきらめない心、そして互いを信頼するチームワークです。自分がヒーローになりたいという気持ちはだれでもあるでしょう。そうなれば、自分の収入も増えます。ですがその気持ち

があつてもそれ以上に、チームのためにベンチにいても全力で応援し励ます姿、仲間のために汗を流す姿、自分の役割を果たそうとする姿、最後まで走り続ける姿に、感銘を受けるのではないのでしょうか。言い換えれば、「上手な選手」が集まっているだけでは強いチームにならないということです。

苦しい時でもあきらめない力。仲間を信じる心。自分の感情をコントロールする力。最後まで努力を続ける姿勢。そして、仲間の成功を自分のことのように喜ぶ心。これらは近年よく耳にする「非認知能力」と呼ばれる力です。この力こそ(おうちでも園でも)幼児期に育てたい最も大切な力の一つです。

こども園では、虫を見つけて夢中になること、友達と力を合わせて遊ぶこと、転んでもまた挑戦すること、年下の友達に譲ったり思いやりたりすること(※一)など、毎日の遊びや生活の中で、この非認知能力を育てています。

例えば、「夢中になる」ということでは、虫を何時間も追いかける子。泥団子を何度も作り直す子。ダンゴムシを毎日探す子。竹馬乗りにも何度も

挑戦する子。一見すると「ただ遊んでいる」ように見えます。でも、その子ども達の心の中では、「もっと知りたい。」「もっと上手になりたい。」「どうしたらできるかな。」という探究心が燃えています。

この「夢中になる力」こそが、将来スポーツでも、芸術でも、研究でも、仕事でも、人を大きく成長させる原動力になります。

遊びは、子どもにとって今を楽しむ時間であると同時に、未来を作る時間でもあります。

今日、園庭で虫を追いかけている子ども達の姿は、二十年后、夢中になって仕事に取り組む姿につながっているのかもしれない。今日、友達と意見がぶつかりながら遊んでいる姿は、将来、仲間と力を合わせて困難を乗り越える姿につながっているのかもしれない。私たちは、そんな「未来の芽」を毎日見守っているのです。

WCの舞台に立つ選手も、最初はボールを追いかけることが楽しい一人の子どもでした。今、園庭を元気に走り回る子ども達の中にも、将来どんな夢に向かつて羽ばたく力が育っているのかと思うと、とても楽しみ

です。私たちは、その「見えない力」を大切に育てていきたいと思います。

WCで輝く日本代表の姿は、私たちに勝敗だけでなく、「人として大切な力とは何か」を改めて教えてくれたと感じました。選手が「申し訳ありません。」という必要はありません(ですがそれも素晴らしいことです)。誇れる代表でいてくれたことに私たちが感謝しないといけないと思います。この日本代表の姿は、子どもたちに育てたい人間性そのものだと思えます。子どもたちが将来、それぞれの場所誰かを支え、支えられながら、自分らしく輝ける人へと成長してくれることを願っています。そんな思いにさせてくれた二〇二六の戦いでした。(ブラジル戦後、一部改変)

※一↓今年二月、熊本県下の、百人ほどの初任者の先生が本園の保育を参観されました。園児の様子を見て「三輪車を年少の子が『貸して』と借りようとしたら、まだ遊ばたそうな年長さんが『いいよ。』と貸してあげていた。うちだったら『あっち行け』『うざい』と言っているかもしれない。』と感想を述べた先生がいまいた。確かに本園ではそのように攻撃的な言葉は飛び交いません。保護者の方々と教職員でこれまで長い間かけて創り上げてきた伝統なのだろうなと感銘を受けました。